

8. 疾患別にみた未熟児外科の分析

長屋昌宏*

〔はじめに〕

1970年から1984年までの15年間に私共が経験した新生児外科症例は741例であった。そのうち成熟児例は575例(77.6%)、未熟児例は166例(22.4%)であった。昨年度は、これらの症例をもとに、

1. 未熟児例の年次別推移
2. 死亡率の年次別推移
3. 各疾患における成熟児と未熟児の死亡率の比較

について検討し報告した。

本年度は、これらの症例をさらに分析し、疾患別での未熟児例の特徴を中心に検討したので報告する。

〔疾患別での未熟児例の頻度〕(表1)

疾患別にみた未熟児例の頻度を表1に示した。未熟児例の頻度が最も高かった疾患は腹壁破裂であり、28例中22例(78.6%)に及んだ。次いで壊死性腸炎が55%と高く、この2疾患が半数を上回った。全体での平均値である22.4%より高い頻度を示した症例は、上記の2疾患の他に、腸閉鎖症、十二指腸閉鎖症、臍帯ヘルニア、食道閉鎖症であった。胃破裂と鎖肛は平均的な頻度であった。それに対して、横隔膜ヘルニア、肥厚性幽門狭窄症、腸回転異常症、ヒルシュスプルング病での未熟児例の頻度は低く、最も低かったのはヒルシュスプルング病の2.4%であった。

以下の分析は、未熟児例の頻度が全体の平均値より高かった6疾患に関して行う。

1. 食道閉鎖症

食道閉鎖症での未熟児例は20例(32.2%)であ

り、それらの生下時体重は1,350~2,400 gr、平均1,968 grであった。未熟児例の特徴は合併奇形を伴う頻度が高かったところにあった。

即ち、成熟児での頻度は42例中10例(24%)であったのに対し、未熟児例では20例中16例(80%)と高率であった。そして、生存が困難な合併奇形のために死亡する例が未熟児例に多いことも特徴的であった。即ち、成熟児例では死亡した8例のうち合併奇形が直接死因となったものは2例に過ぎなかったのに対し、未熟児例では死亡8例中5例までの死因に拘わっていた。それらの疾患は、複雑心奇形2例、気管食道裂、トラチアコリンズ症候群、18トリソミー各1例であった。

2. 臍帯ヘルニア

臍帯ヘルニアでの未熟児例は15例(34.1%)であり、その特徴は食道閉鎖症とよく似ていた。即

表1 疾患別にみた未熟児例の頻度

疾患名	例数	未熟児例数
腹壁破裂	28	22(78.6)
壊死性腸炎	20	11(55.0)
腸閉鎖症	52	22(42.3)
十二指腸閉鎖症	33	12(36.4)
臍帯ヘルニア	44	15(34.1)
その他の腹膜炎	15	5(33.3)
食道閉鎖症	62	20(32.2)
胃破裂	22	5(22.7)
鎖肛	124	23(18.5)
横隔膜ヘルニア	34	4(11.7)
肥厚性幽門狭窄症	65	6(9.2)
腸回転異常症	26	2(7.6)
ヒルシュスプルング病	85	2(2.4)
その他	131	17(13.0)
合計	741	166(22.4%)

* 愛知県コロニー中央病院小児外科

ち、生下時体重は1,800~2,400 gr, 平均2,060 grであり、合併奇形を伴う頻度も12例(80%)と高かった(成熟児では10例, 34%)。そして、死亡例の検討でも、成熟児例では、1例(16.7%)のみが合併奇形を直接死因にしていたに過ぎなかったのに対し、未熟児例では、死亡した9例中8例(88.9%)までが直接死因に拘わっており、食道閉鎖症より顕著な特徴となった。それらの疾患は、13トリソミー2例, 18トリソミー1例, 汚溝外反症2例, 極端な側彎症, 多嚢腎, 複雑心奇形各1例であった。

以上の2疾患は、未熟児例の死亡率が高いが、その理由は合併する高度の奇形によるところに特徴があった。

3. 壊死性腸炎

壊死性腸炎では11例(55%)が未熟児例で占められた。未熟児例の特徴は、まず病変部が回腸末端部に限局している例が多かったことで、成熟児例で多い広範囲の病変部と異なっていた。生下時体重では750~2,380 gr, 平均1,540 grと少なく、特に4例は1,000 gr以下の超未熟児であった。超未熟児例の壊死性腸炎は、管理に難渋し、3例を失った。即ち、体温、体液、感染、栄養などの管理法に問題があり、早急な開発が望まれる。

4. 腹壁破裂

未熟児例が占める頻度の最も高かった腹壁破裂においては、明るい結果を得た。即ち、全例がsmall for datesの未熟児であり、体重でも1,680~2,450 gr, 平均2,143 grと恵まれた。そして、高度の合併奇形を伴うこともなかった。治療の面では、経静脈栄養法と人工換気法が威力を発揮し、とくに人工換気法の導入以来、成績に飛躍的な向上(16例中13例生存)を見ている。

5. 腸閉鎖症

腸閉鎖症における未熟児例は22例(42.3%)と高かったが、全例がsmall for datesであり、体重でも平均2,120 gr(1,500~2,480 gr)と大きかった。死亡率でも成熟児例と大差なく、15%前後に止まり、未熟児例での特徴に乏しかった。死亡例の75%は極端な短小腸になったことにその原因があった。

6. 十二指腸閉鎖症

十二指腸閉鎖症における未熟児例は12例(36.4%)であった。特徴としては合併奇形の頻度が7例(58%)と成熟児の29%より高かったことにあるが、それらが直接死因に関係したものはなかった。

【おわりに】

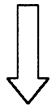
私共が過去15年間に経験した新生児外科症例から、各疾患別での未熟児例の特徴を分析した。その結果以下の結論を得た。

1. 未熟児の外科疾患は増加の傾向にある。
2. 疾患別では腹壁破裂、壊死性腸炎、腸閉鎖症、十二指腸閉鎖症、臍帯ヘルニア、食道閉鎖症で平均より多発した。一方、横隔膜ヘルニア、幽門狭窄症、腸回転異常症、ヒルシュスプルング病では稀であった。
3. 食道閉鎖症、臍帯ヘルニアでは未熟児例の死亡率が高いが、その原因は高度の合併奇形を伴いやすいところにあった。
4. 壊死性腸炎は極小未熟児や超未熟児に見られることが多く、その管理法の開発を急ぐ必要がある。
5. 腹壁破裂、腸閉鎖症、十二指腸閉鎖症では未熟児での特徴に乏しく、それが死亡率を左右していなかった。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔おわりに〕

私共が過去 15 年間に経験した新生児外科症例から、各疾患別での未熟児例の特徴を分析した。その結果以下の結論を得た。

1. 未熟児の外科疾患は増加の傾向にある。
2. 疾患別では腹壁破裂,壊死性腸炎,腸閉鎖症,十二指腸閉鎖症,臍帯ヘルニア,食道閉鎖症で平均より多発した。一方,横隔膜ヘルニア,幽門狭窄症,腸回転異常症,ヒルシュスプルソグ病では稀であった。
3. 食道閉鎖症,臍帯ヘルニアでは未熟児例の死亡率が高いが,その原因は高度の合併奇形を伴いやすいところにあった。
4. 壊死性腸炎は極小未熟児や超未熟児に見られることが多く,その管理法の開発を急ぐ必要がある。
5. 腹壁破裂,腸閉鎖症,十二指腸閉鎖症では未熟児での特徴に乏しく,それが死亡率を左右していなかった。